

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意見陳述書

——侵略戦争に反対し、世界平和を熱愛する——

2006年10月25日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市渝中区宏声巷24号宏声大厦18-5

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 羅 漢

1. 私は羅漢といいます。本日、私たち重慶大爆撃原告団が日本の東京の裁判所において、日本帝国主義の中国侵略戦争の罪を訴え、死亡した被害者同胞のために恥を雪ぐことは、私どもの60数年来の願いでした。

私は、1933年湖北省の武漢で生まれ、今年73歳で、重慶大爆撃の生存者であり被害者です。

1938年、日本軍の侵略が激しくなったために、父母について武漢を離れ、四川の重慶に避難しました。当時重慶は抗戦の陪都〔第二首都〕で、日本軍は重慶を打ち砕いて、中国を滅亡させようとはかりました。しかし重慶には三峡という自然の要害があり、四川は盆地で、周囲は山が取り巻き、日本の陸軍と海軍は攻めることができず、そこで、日本は大量の航空隊を動員

し、重慶、四川に対して五年半にわたる「無差別爆撃」をはじめたので、私たち一家はさらに重慶の郊外である合川に移りました。

2. 1940年7月22日、日本は百機近い航空機で、3回にわけて、合川に500発余りの爆弾を投下し、合川県城は約7割が爆撃で破壊され、人民の生命財産の損失は悲惨でした。私の父親（羅志強、1907年6月16日生まれ）はこの日の爆撃で亡くなりました。合川が爆撃された日の朝、母（呉理華、1917年11月21日）は、私と妹を連れて友達の家に出かけました（それで被害を逃れられたのです）。その途中で、私たちは、合川城内からの警報を聞きました。続いて日本軍の飛行機の群れが合川の方へ飛んで行くのが見えました。母は、私と妹を竹林に連れて行き避難させ身体を覆い被せて私たちを護ってくれました。間もなく、ドカン、ドカンという爆弾の爆発音を聞き、合川城内が火の海になったのが見えました。

爆撃が止み、敵機が去ると、母は、私たち兄弟を友達の家に出かけ、急いで市街地に戻って行きました。後で私は、母から、父が死んだ爆撃被害の状況を聞きました。母は、戻る途中、川辺付近で、市街地から逃げてきた多くの罹災者を見たそうです。そのとき母は、川岸で、茫然とした姿で手に小包を持って座っていた祖母を見つけました。祖母は、泣きながら、「家が爆撃で壊され、隣の一家が死亡し、父は爆撃で重傷を負った」ことを母に告げました。父の手のひらは爆弾の破片で潰され、右足は機関銃弾で貫通され、すぐに救護隊に病院に送られたとのことでした。母が父をみつけた時、医者は重傷なので北碚医院で治療しないと言いました。翌日、北碚江蘇医学院に移ると、医者は破傷風だと診断し、もう会話もできない状態で、その日の深夜、病院で亡くなりました。私と妹は、最後に父に会うことさえできませんでした。

し、重慶、四川に対して五年半にわたる「無差別爆撃」をはじめたので、私たち一家はさらに重慶の郊外である合川に移りました。

2. 1940年7月22日、日本は百機近い航空機で、3回にわけて、合川に500発余りの爆弾を投下し、合川県城は約7割が爆撃で破壊され、人民の生命財産の損失は悲惨でした。私の父親（羅志強、1907年6月16日生まれ）はこの日の爆撃で亡くなりました。合川が爆撃された日の朝、母（呉理華、1917年11月21日）は、私と妹を連れて友達の家に出かけました（それで被害を逃れられたのです）。その途中で、私たちは、合川城内からの警報を聞きました。続いて日本軍の飛行機の群れが合川の方へ飛んで行くのが見えました。母は、私と妹を竹林に連れて行き避難させ身体を覆い被せて私たちを護ってくれました。間もなく、ドカン、ドカンという爆弾の爆発音を聞き、合川城内が火の海になったのが見えました。

爆撃が止み、敵機が去ると、母は、私たち兄弟を友達の家へ預け、急いで市街地に戻って行きました。後で私は、母から、父が死んだ爆撃被害の状況を聞きました。母は、戻る途中、川辺付近で、市街地から逃げてきた多くの罹災者を見たそうです。そのとき母は、川岸で、茫然とした姿で手に小包を持って座っていた祖母を見つけました。祖母は、泣きながら、「家が爆撃で壊され、隣の一家が死亡し、父は爆撃で重傷を負った」ことを母に告げました。父の手のひらは爆弾の破片で潰され、右足は機関銃弾で貫通され、すでに救護隊に病院に送られたとのことでした。母が父をみつけた時、医者は重傷なので北碚医院で治療しないとダメだと言いました。翌日、北碚江蘇医学院に移ると、医者は破傷風だと診断し、もう会話もできない状態で、その日の深夜、病院で亡くなりました。私と妹は、最後に父に会うことさえできませんでした。

3. 父の職業は、クラブで音楽（クラリネット、バイオリンの演奏）をしていました。父が亡くなった時には、まだ33歳で、私はわずか7歳でした。父が亡くなった後、母は、祖母、叔父（母の弟）および私たち兄弟の面倒をみなければなりません、頼るべきところがなく、母は、やむなく人に頼んで15歳の叔父をある印刷工場に少年工として働かせました。また私は歌乐山孤児院に送られました。母親は生活が成り立たないので、祖母と妹を連れてよそに嫁ぎなおしました。

孤児院での生活条件はとても悪く、三食ともお腹一杯食べられず、肉体労働もしなければなりません。山の上から岸辺まで米や、木板を運びました。子供たちのなかでは栄養不良で夜盲症になり、夕方になると目が見えなくなりました。私の子供時代は避難と大爆撃の災難の中で過ごしました。重慶大爆撃によって、私は家を失い、家族もばらばらになりました。この血と涙の家族の歴史は一生忘れられません。

4. 日本軍国主義の重慶と四川に対する大爆撃は、完全に侵略行為であり、手に寸鉄も帯びない平和に暮らしている住民に対して、「空中の大虐殺」を行ったのです。ここに、私は大爆撃で殺された父親と六万余りの同胞のために問題をはっきりとさせたいと思います。犠牲者は死んで60数年たっても、しかしまだ瞑目することができないのです。日本軍国主義の中国人民への血の債務は、なんとしても取り戻さねばなりません。それゆえ、私たちは日本政府に対して、中国侵略戦争の罪を負うことを要求します。賠償してもらえないことは民族の恥辱であり、脆弱さのあらわれです。正義の賠償の行動は必ずや中日人民の支持をえて、成功できると信じております。

どんな戦争でもその被害者はいつも普通の住民たちです。普通の住民にとって戦争は甚だしい災難です。ここで、我々は大きな声で呼びかけます、

「戦争を反対し、平和を愛しましょう」。

私は、世界の永遠の平和のため、天津の劉波と共同で「平和頌」という歌を作りました。

広い空に白い鳩は飛び、世界の人々は平安を享受する。

我々の生活は平和で幸せで、愛は永遠で紛争がない。

この世界の人々は兄弟のように共存し、ともに平和の歌を歌う。

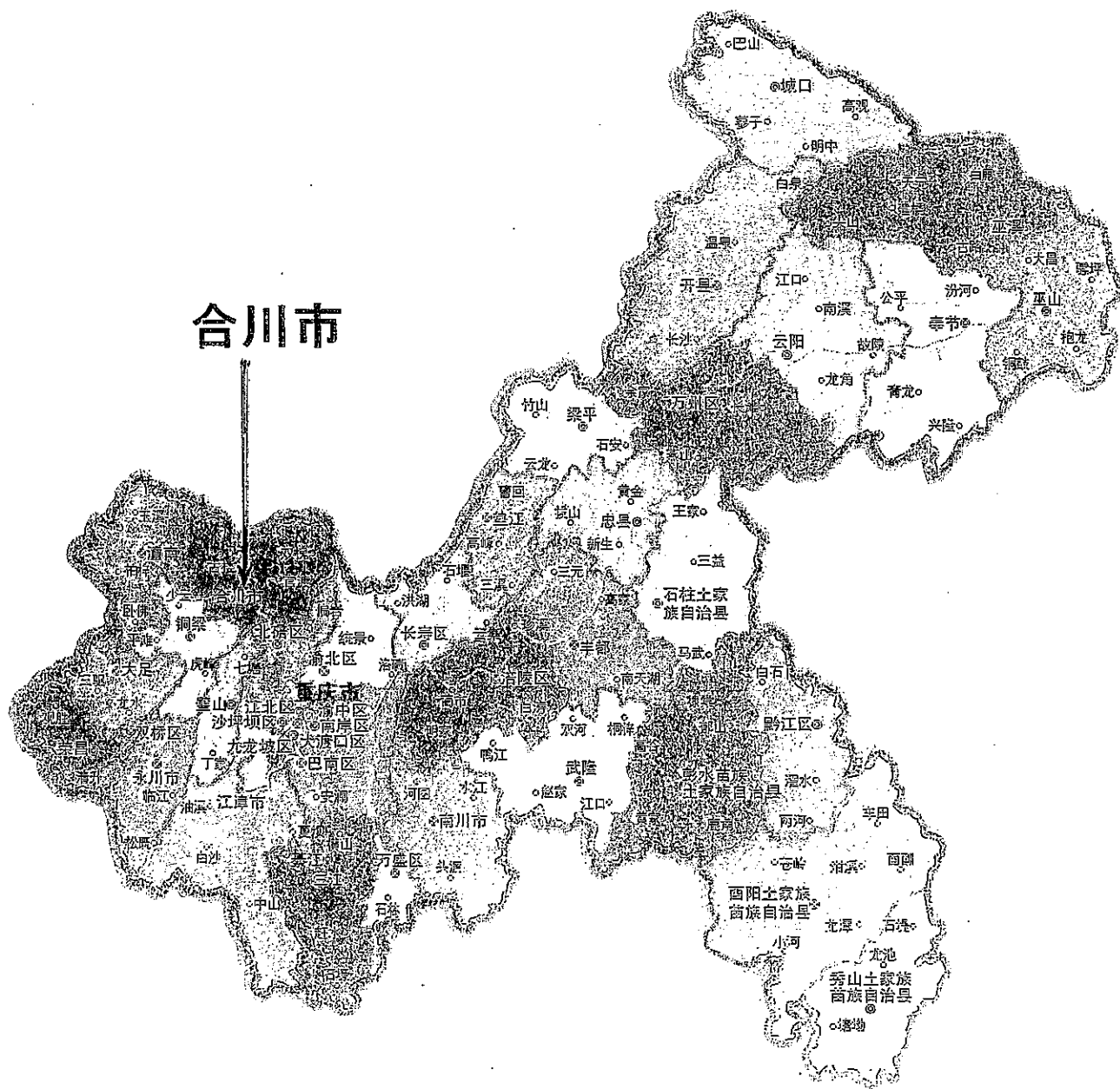
皆が手をつなぐ大同の世を求め、世界の平和を祈る。

私は、この歌を創ったとき、「戦争の苦難を経験した人々は、もっとも平和を大切にし、もっとも強く平和を求め、守らなければならない。」と感じました。現在私たちは、平和を維持し、守るために行動しなければなりません。

最後に、中日人民の永遠の友好が実現されることを祈ります。世界の民衆は団結して平和のために行動しましょう。

以上

重慶市全圖





先親 羅自強 (1907年6月15日生 — 1940年7月22日大轟炸身亡)



母亲吴理华(前)罗汉 外婆吴王氏 舅王静尘 妹妹吴洁

(从左自右)左端が母親吳理華、2人目が原告羅漢